

日本長家秘用卷八

○硯墨筆

け部は硯墨筆乃まらひ
や、硯水此用ひやう紙よら
て、まら書やう唐紙乃目
折乃まら朱印肉乃あつせ
やうまら成ころん

○染色

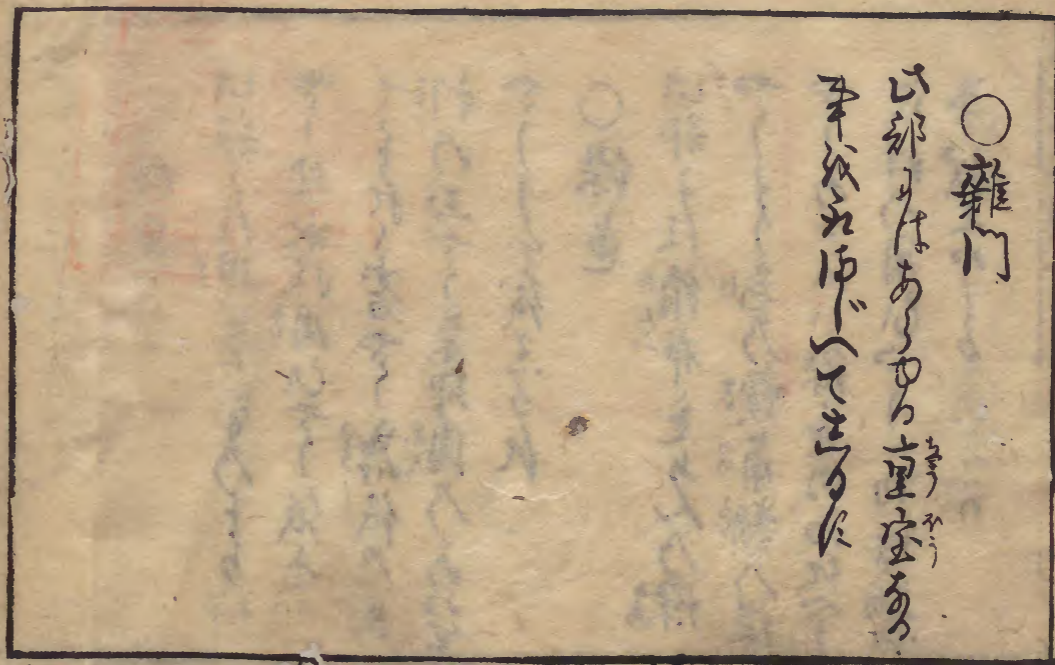
け部は絹布とめん乃染
やうまら毛乃類角類乃染
やうあるハハ染色のめんやう
灰汁乃用ひやう一切染物の
事成ころん

長家秘用

大塚家

○雜門

い部やはあゝのり直室あり
平紙を中へてきりぬ



日本居家祕用卷八

○硯雲筆

非の端乃と小書畫を書よ

油氣紙を今一紙を敷る

のふ契灰紙を八換ふ守

て油氣とらん又真綿ありふ

ハ灯心少く拂毛

▲常小用紙は切ぐ紙を

墨に濡しんをいやがとに

拂りては之ハ眼氣ありぬ

紙を今よりて管紙濡ら

居家祕用

細字紙書いたを紙改

ひき毛種或ハ紙ふて拭

履う毛紙墨ふ限とれ

ハ害トある

▲腹紙洗ふに其肉乃わけ

けを切うの小にふてせり

洗ふ乃滯り墨雲垢紙

ねりきり破紙扱は 洞天筆談

▲毛邊紙ハ 南京乃官紙

ととらねるを唐紙を法紙

法紙づりて音紙とら紙

くは紙洗つて厚く

まき甚墨かした洗黄赤ふ

して鶏卵乃ふ似る紙

とふとに俗ふ墨紙にいり

ふとりのまきわくして墨紙

紙下墨とれ

▲腹管乃中ふ常ふ番椒紙

二つ三つ月と入るは墨漬お

のはるか一是法とらる

ふとらるあり

▲胸梅樹皮紙灰乃水不浸

尾家必用

三

てまきば光彩あり

▲冬月乃次の水不肉桂液牌

此縮小法に浸しきて用

白身片散定ふと沸くは又

丁子液用等とす

▲硯ハ紫石液用等 肌濃

少て液ひあり夏も水乾

かば紫石ハ此次なり

○赤間実より紫石書るも

み硯ふはより出れ人ハ青石

以勝せりと云ふ乃硯ハ他

ハ乃青石然ハ一源也

▲墨紙摺ハ石面ホ志のと

あそゆるやふ摺るハあまり

はよく力紙のまじらをも墨書

アハ又あまりゆるやふあるも

異濃かりはよ紙用紙者

也

▲墨乃善悪紙試あふた

字中実紙よはよくあじべ

一細字よは志書か

▲唐紙ハ厚墨天を用る也

トシノモ貴族ありて
懐なり黒云ハナれあり

▲地紙ぢぢハ紙カミハ墨スミ久

落うつくもわらや小書コガキなり或

ハ胭脂ウベスセ青アヲ墨スミ入い入い入い

からん

▲墨スミ淡タン則スレバ傷ケガレ神カミ彩イロ太タ濃ノリ則スレバ

滯ヒジメ鋒ホウ鈍ドン書カキ学ガク提テ要ヨウ

▲養ヤウ視シ 硯イン乃ナラバ池イケハ乾カレなり

らハ毎日マヅメニ水ミヅ残ノコリかえてカエテ煙ケムリ

々々タタタ墨スミ五イハレ以ヨリ初ハジメハ水ミヅ残ノコリ

くハ下シタるルハ用ヨウハ好コトハ直ナカ

々々タタタ久キウハ浸シメハ

墨スミ淡タン矣ヤ世セハ洞ドウ天テン研ケン録ロク

▲筆ヒツ以ヨリ十ジュウ月ゲツ正セイ二ニ月ゲツ收ウケ者モノ為シ佳カチ

養ヤウ筆ヒツ以ヨリ硫リウ黄ワウ酒シュ舒シュ其キ毫マウ洞ドウ天テン

▲筆ヒツ毛モウ八ハチ杖シヤウ八ハチ月ゲツ取トりテ末マツ

白シロ毛モウハ身ミ一イツハ

毛モウ切キるルハ但タ小コ

筆ヒツ乃ナラバ油アブハ蛤カキ也ヤ莫ムシクニ竹チク

紙カミ用ヨウ也ヤ

▲柔ユウ紙カミハ強キヤウ筆ヒツ用ヨウハ強キヤウ

居イ家カ必カナラシ用ヨウハ

紙は果字紙用して強

果相かきりひる

唐紙小大字紙かいて文字

やぶまてるい裏より類紙とい

はくろひ墨紙の文字紙補ふ

魚

朱印肉 白鳥乃じく毛紙

肉としり紙良方と伝又艾

紙よくととて空中乃清水

かて曝し日ふ干し又ヒて

ふて灸直白あてて朱と

麻子れ油 入て交合せ

但朱紙石乃播本よとせり

美久紙さりて用紙底小

まづもろ紙ななり

○又黄蜡 辰砂 胭脂も

加へるにぞ

○一方小竹乃上皮紙けせり紙

あまをぞ紙小力をまき押く

けせりなる紙を落くこ紙

うふとて用也

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 唐書補序 and 卷之八.

○ 染色

▲ かんぼろ染 がわめ 先藍 そらぢ みて下地
 を漂 そめ うの、ち楊梅皮 マヤシのくわ 十斤
 灰水 アハ 二斗 今一斗 アハ 小煮
 二番 小水 アハ 二斗 入九升 アハ 小煮
 右の汁 アハ みて之四度 アハ ともを
 上灰 アハ 酢 アハ 五升 小煮 アハ 屑 アハ 五合
 或ハ古打 アハ 乃類 アハ 灰 アハ 入 アハ 煮 アハ 小
 下 アハ ちて好 アハ 色 アハ 申 アハ 一 アハ 煮 アハ 及 アハ ハ アハ 三 アハ 日
 冬ハ四 アハ 五 アハ 日 アハ 月 アハ ほど アハ 煮 アハ 小 アハ 灰 アハ 以
 一 アハ 斗 アハ ん アハ とも アハ 又 アハ 楊 アハ 梅 アハ 皮 アハ 乃 アハ 汁

へほけの四度とひらかかれ
 おくそめておと事と四度
 して好まぬおと事と四度
 五月の袖は夏袖ハ之端乃
 深汁なりけ法は深赤小
 羽衣法あり但深赤は
 ねほを下深赤せらる地也
 ようり一夏年乃好ハ赤いそ
 矢河一冬を下の深赤く
 ころほど矢かりくぞて地
 法一

▲又法下地の 藍をそめり
 乃上城五倍子石榴皮を煮
 一とろ成りけ又融れ汁小ひ
 一宿して正色乾る
 け法地法扱でん
 ▲うらん染 うらん乃粉成縮
 一夏は八両ほど水へい茶
 稼小麻を半分ほど入る
 但二時とろけほけとろろ
 一とろあつ湯にて染る
 ▲嵐久深 茄子乃木灰を
 居家必用八

炭^{せい}の形^{かたち}よく正^{ただ}りて水^{みづ}中^{なか}の
 の魚^{いし}名^なあひ切^きふはちこころ
 えて漂^たる^る但^た酢^すとてさら
 漂^たまははやありていろと
 よし
 ▲桑^{くわ}乃^の皮^{かわ}を炙^いじて褶^ひ多^た分^{ぶん}
 そむまは久^くく落^{おち}れ
 ○いせ乃^の本^{ほん}灰^{はい}炙^いじて漂^たると
 久^くく落^{おち}れ
 ▲砂^{すな}んぼろ^ろ漂^た下^{した}地^ち灰^{はい}炙^いじて
 小^せ漂^たてろの^の紙^し襖^た本^{ほん}乃^の汁^{じゅう}

ふて二三返^{へん}と^と洗^{せん}漿^{じょう}小^{せう}五^ご倍^{ばい}
 子^こ灰^{はい}少^{せう}加^かへてと^とし
 ▲桑^{くわ}漂^た 桑^{くわ}乃^の本^{ほん}灰^{はい}炙^いじて
 ぶびくそあをれと洗^{せん}楊^{よう}梅^{ばい}
 皮^{かわ}乃^の汁^{じゅう}ふて二^に返^{へん}と^と梅^{ばい}乃^の
 灰^{はい}汁^{じゅう}めてそむる
 ▲止^と竹^{ちく}漂^た 茨^い去^そ瓜^かやれて
 大^{だい}小^{せう}芥^{かい}乃^の灰^{はい}少^{せう}加^かへてと^とし
 て大豆^{だいず}を^をしりろの^の汁^{じゅう}めて
 あはせろ灰^{はい}少^{せう}加^かへ剛^{こう}毛^{もう}とて
 切^きりて漂^たる^る思^しこめけた

次と記れ墨を少加へ
又阿仙薬丸大豆汁小入を
そひりしり

▲おろしけな 衣しき汁深
乃こくうきくして深

▲萌黄深 下地を定久用と

小藍ゆへ深うのふ紙かろき
乃黄ド汁ゆて返深うの

ふ代用汁ふ明燻少加へ
てそひり

▲柳葉竹 一地域汚濁

黄小をあまのふ紙かろき
乃黄ド汁ゆて返えあう
のふ代用汁ふ明燻少加
てそひり

▲黒豆び 糶本乃黄ド汁

小て二返えあうのふ紙楊
梅皮乃汁ゆて返えあ又

糶本の汁ゆて返えあ様
乃灰汁ゆてとら法將水をか

け糸緑燻をかろき
▲糶本深 小入すう紙

居家必用

煮下唐乃明鑿を合せ煉へ

一 漆汁乃さあぶら内は漆よ

死天動ふ不せけふよ一若冷

いん時月 潤潤或ハ去 潤ふ

温の漆乃 法 潤ふ久くと

入 並ハ多り 一 法をいじを

▲ 煮下 楊梅皮乃 煮汁

ふて二返 煮下 のと 灰 楨

乃 灰汁 ぬくと じり

▲ 煮下 月 汁 ぬて 二返 漆

楨乃 灰汁 ぬくと じり ぬ

てとじり

▲ 煮下 下 地 灰 楨 本 乃 汁

ぬて二返 煮下 のと 灰 楊梅

皮乃 汁 ぬて二返 煮下 のと 灰

楨乃 灰汁 ぬくと じり

▲ 煮下 湯 灰 何 へ 煮下 と じり

よ 灰汁 ぬくと じり ぬ

うの中 へ は 煮下 煮下 一 煮下

うの 煮下 煮下 煮下 煮下 煮下

又 煮下 煮下 煮下 煮下 煮下

▲ 灰汁 漆 煮下 藍 灰 煮下

煮下 煮下 煮下 煮下 煮下

居家 必用 八

八辛灰ハシなり是レ小規コキ殺ス乃チ灰ハ
 巾フをレ入ル加ヘて灰汁ハふレて
 用ヒて去リてレんハ久クあリ辛シ
 灰ハ種シ作シ等シれレ枝ノ乃チ灰ハ
 ○麻マ世セ字ジ灰ハ濯ソめレ綿綿実実のノ灰ハ
 汁ハ灰ハとシらシ○布布帛帛灰ハ濯ソ
 八福フ葉葉れレ灰汁ハを用ヒてレ系系深深
 蓋蓋深深をレ於レ乃チ灰汁ハをレ少少加加
 之レはレ久久変変ずル○早早福福葉葉のノ
 灰汁ハ少少てレ紅紅粉粉をレ洗洗へレハハ紅紅
 粉粉とシてレ

▲深深毛毛法法馬馬乃乃毛毛以以早早福福葉葉
 乃乃灰汁ハよよてよくく洗洗ひひ米米泔泔汁汁
 小小二二日日月月どどはは多多くく至至葉葉水水小
 てよくく洗洗ひひ目目ふふかかしてレ好好を
 むむがが深深汁汁乃乃法法ハハ積積本本晒晒
 肥肥松松十五十五匙匙葉葉乃乃葉葉十十枚枚入入よ
 くく煮煮じじ塩塩十五十五匙匙おおろろろろハハゆゆ
 湯湯加加減減ううてレ深深汁汁をレ換換れ
 ハハああ一一但但二二日日月月どどはは多多くく
 取取出出しし加加減減をレ入入目目ふふ日日
 二二日日月月どどはは多多くく水水よよてレ

居居家家必必用用
 廿一

大正十一年

くは洗ふなり。青は小深

くは緑青を酸すめてとれお

酸すし度ふいつらどらやうふ

かたはりしがふゆして深いへ

し牛乃毛けをくまゆり

▲藍乃あもふ付てるは洗い英

乃けい煙いふて蒸くれハいころ

▲若乃わ深い汁じを小深い付てるハ

酢すふて洗いふなり又梅う酢すふて

洗いふとこし

▲本綿ほん絹布けんとこしい深い地ち洗い湯ゆ

ふ部ぶ下げくまゆりて深いき

かむかるをくして深いやとら

か汁じを少すあまるとあて

深いなり深い汁じをくまゆり深い

しりおあり

▲角つの類るいを洗いう法ぽう 磁ま急きゅうふて

紅く瓜か梅ひむむに乃の酢すふてとれ

紅くききふふ生せい塩えん硝せう五ご分ぶん入い炭たん

火ひふふけけ紅く乃のあありり

時とき象ぞう牙があありりハハ鹿しか角かく馬ば骨こつ

棘くしのの白しろ骨こつ乃の類るいふてははり

居い家け必ひつ用よう

廿三

くろ御并緒しり乃類を染

家小甚紅なる久

▲唐紅染 糠木百目黄柏二両

松脂二両 右之各を二兩小突

止まけ中紅乃よとくお大

あがる

染やうハ

一石の茶末汁 四十目 かりやせ十五

すみ 早目 明礬三五

右一兩ふあせ水二升入

突し一くをを染ゆして好

瓢ひょうして蒸いせぎ一紅染こうせんのこ

くそゆり

▲濃染濃乃法 生洗せいせん一升小水

九升入たひふてよすま和合わがせ

生布なまのふても晒布ひらふてもま乾

水すいよく粘氣ねりけをたと右乃

濃水濃水へはけくとと合せ棹せう

小かけろの下ふ濃水乃入

たとひをひままて布をぬる

て干かしてま度かと濃水の

煮くみみでぬてるをる

淡久しあぐりてす死
久小そゆか
...
...
...
...
...
...

○雜門

▲旅中法 在旅中時
是小使成わらるる運を
又從運してのち
成わると是乃裏小わり
てあつる
○又道成りては
湯漬飯成食と
てろのゆき
販いむら

又汁飯のやうな飯は湯漬
あつて喰ふるとよー

▲早天まうてん小山野こやまふり附つ生なま一

塊くわい状じやう之のよりは霧きりがる濕しつ氣き

ふ正ただの邪よこしま氣きふたたるるれれ

▲大蒜たしかく酒さけ小こ浸ひしし鼻はな乃の孔あな

小この生なまはは言ことば中なか小ことと定さだ氣き

張はををぐぐ又また白しろ邪よこしま手て足あし小こ酒さけ

邪よこしまくくをを生なまはは邪よこしま氣きふふやや

ららままん

▲旅たび中ちゆう宿しゆくくくふふててはは育よくより

草くさ蛙か釜か釜かのの介まままり

飯い集じふちち手て拭ぬぐ乃のかかしし飯い定さだ

定さだままるる言ことばふふたたるるややもも

ババのの朝あ夫つとああるるなないいつつとと

大おほ事こと乃のおおのの座ざ敷しき乃の中なか小こおお

おおままりりままるるららるる

▲入い十じふ月げつ而して生なま馬ま十じふ二に月げつ而して生なま拘こう

三さん月げつ而して生なま象ぞう四し月げつ而して生なま猿さる五ご月げつ

而して生なま禽いん鹿か六ろく月げつ而して生なま虎こ七しち月げつ而して

生なま虫むし八はち月げつ化か博物志

▲令しん剛かう乃の心こころ石いし以もつてんんががけけハ

書家必用

石乃肌

石乃肌 灸あり

煙草灰 封じたるの上 灰油

紙ありひの濃紙ふては

かゝらうて桐の管又ハ磁

器に類古の酒樽乃中ふ

入るる

山漆よく金具の病を治す

養猫法 猫甚杖二季ふ

子成らむ杖乃子は杖はく

そらわらへし性定ぬおそく

灰あり杖よそ六十日ゆて

けらせまきて一七日してそめ

て眼を穿く三旬を待て

神て飯を食ふ一月を候て

て猫乃おとさす友をうらな

源時乳紙をあきてよそそ

ひ〇れよそ病猫は生流

美汁又鹽臭泥餅

ひ皆よく治す又方胡椒乃

末灰水ふて丸一用ひ猫

の辛味ふせりあどと甚志

居家必用

十一

る一あり但頭^{くち}死^しと^と魚^{いし}を
引あぐる^ひ御^お乃^の尻^し尻^しあり
つ^つ尾^おの^の根^ねふ^ふ冬^{ふゆ}も^もれ^れは
け^ける^るハ^ハ尾^お乃^の根^ねふ^ふ冬^{ふゆ}も^もれ^れは
昂^もい^いや^や〇^〇又^{また}指^ね尻^し初^はめ
飼^くと^と此^こ蛤^か殻^が燻^もく^く食^く一^一む
も^も何^{なに}を^をふ^ふい^いで^でん

▲[▲]居^い雄^{ゆう}法^{ぽう} 雄^{ゆう}ハ^ハ海^{うみ}ハ^ハ死^し
か^かし^し石^{いし}ハ^ハお^おく^く付^つく^くハ^ハ魚^{いし}
さ^さ海^{うみ}お^おく^くハ^ハ石^{いし}尻^し初^はめ
も^も何^{なに}を^をふ^ふい^いで^でん

ぶ^ぶけて^て魚^{いし}一^一先^{せん}乃^のさ^さげ^げや^やハ
お^およ^よそ^そき^き海^{うみ}ハ^ハ人^{ひと}あ^あハ^ハ六^む寸^{すん}四^じ
分^{ぶん}さ^さづ^づる^るあ^あり^り一^一尺^{せき}ふ^ふ六^む寸^{すん}重^{じゆう}さ
か^かり^りの^のほ^ほも^もり^りな^なり^りほ^ほ不^ふの^の傾^{かたむ}
死^しと^とい^いか^かひ^ひお^おて^てさ^さげ^げて^てす

▲[▲]草^{くさ}木^き乃^の滋^しけ^けは^は皆^{みな}月^{つき}亦^{また}海^{うみ}
也^{なり}月^{つき}満^みち^ちは^は氣^きら^らる^る月^{つき}ハ
月^{つき}虚^{きよ}也^{なり}其^{その}氣^き燥^{あせ}く^くま^まる^る
其^{その}也^{なり}一^一小^{せう}上^{じやう}強^{きやう}ハ^ハ好^ご下^げ強^{きやう}ハ^ハ好^ご
ハ^ハ竹^{たけ}也^{なり}伐^たつ^つ小^{せう}ま^まる^る一^一く^くハ^ハ

三^{さん}鱈^{たう}也^{なり}

本草綱目 卷之八 骨節

▲小鳥の病痰治すは
番柿を水小浸してその
汁或はふそぐるも又蟬姑
を餅とまきは湯いぐる

▲令奠乃蒸とまきは湯いぐる
乃志はる汁或はふそぐる入
まは湯いぐる

▲鶴の骨をい留ふはくれ
ハ甚清然ある今脛の骨
を用也

▲古中手足凍へる法

古酒一升生姜六十目度
さうまく細切し搗ふ入火
ゆぐた紅て半分はふそ
ぐるゆそぐる或は小豆粒月と手
足ふゆそぐるはよく室氣痰とせ
たて凍へは

▲猪中食把あを飢らる時
艾乃生ある食ハ飢痰
志のぐ又挽菜よく飢痰
▲所風痰去法 百部根秦艽
等分末とかり竹葉水煎

居家必用

紙を以て下小火炭を置き
ば衣帳乃虱死して落家
又白鳥乃紙乃を以て水
を入下常小結紙を以て虱
とくく死せ

▲牛乳風炭殺しは面部根
紙を以て洗ふ

▲常葉紙を以て小児の衫衣
紙を以て風を以て洗ふ

▲紙を以て蛇乃類煙草乃脂
紙を以て又胡椒を以て蛇を以て

▲荊葉を以て蚊虫小逼殺

▲油を以て去法 青蒿乃葉
葉を以て電乃圓小捕と紙を以て

▲生蠟を以て腫止法 未蠟を以て

と青蠟を以てと細くして紙を以て

とらけり水乃中へ紙を以て入

と紙を以てくくして紙を以て

源紙を以て紙を以てすくひ紙を以て

紙を以てり月高へ紙を以て葉

蘇家利片ハ

掃ふて水紙を乾かして干
乾かした時ハ又水紙を乾か
度とがれざうして干乾せ
事三日ほどまじらざるの
ことあり

▲五葉小沖乃竹乃ハ先紙紙
わがいとて石灰紙うさけ
金乃

▲途中小て肌小風の通りてさ
むはは紙紙細小あつた
空中小旅ハ桐紙紙用也べ

▲魚鳥紙紙の法 鳳鴨止て
鳥乃否紙と新ハ紙紙紙紙
首の毛文と紫紙あげて
るふわわら紙紙紙紙紙
古やうう小紙紙紙紙紙紙
ノ月のうらうとも月のくさ
そら紙紙紙紙紙紙紙紙紙
眼紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙
光あり鱗紙紙紙紙紙紙紙
とく押てるふ小紙紙紙紙
ハ紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙

手紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙
七

甲付ハナリ

△西海湖界 大坂より依野

白河まで五十五里乃同湖上へ

之はる。白河より同坊のぞり

しまた四十三里乃同八里と

上へ備わ。〇とよりしより流おの

山より清流まで四十五里乃

同ハ下へゆ。〇山より清流より

肥前乃かむ流まで八十四里

乃同上へ之はる。〇長門より

乃をより北くとむよりるる

●そより湖と八九月ハ下へ
はる



日本居家祕用卷八終

号家必用八



内閣
文庫

